

韓国語を母語とする中上級日本語学習者の意見陳述の特徴を探る
- 談話構成と接続表現に着目して -

Characteristics of Opinion Statements by Korean Learners of Japanese
- Analysis of Discourse Structure and Conjunctive Expressions -

国際戦略推進機構・半沢千絵美 金蘭美

キーワード：意見陳述、韓国語を母語とする日本語学習者、談話構成、接続表現、接続詞

外国語キーワード：Opinion Statements、Korean Learners of Japanese、Discourse Structure、Conjunctive Expressions、Conjunctions

要旨

本研究では、日本語母語話者と韓国語を母語とする中上級日本語学習者の意見陳述を談話構成と接続表現に着目し分析をした。18名の母語話者および19名の韓国語を母語とする日本語学習者に意見を求める質問をし、その回答をデータとして使用した。その結果、意見陳述の開始部と終結部両方に主張を述べる傾向は母語話者・学習者ともに共通していたが、学習者の場合は背景情報のみで、明らかな主張がないものがあつた。接続表現の使用に関しては、意見陳述開始部で主張から根拠へ談話を展開する際に母語話者は明示的な接続表現を用いていないケースが最も多かつたのに対し、学習者は「なぜなら」や「なぜかという」と用いるケースが最も多くみられた。また、意見陳述終結部で主張を述べる際の接続表現に関しては、母語話者・学習者いずれも「～ので」等の接続助詞を用いて最後の主張へと談話を展開させているものが多かつたが、「それで」等接続詞のみで談話を展開させていたのは学習者のほうが多かつた。

The purpose of this research is to analyze discourse structure and conjunctive expressions in opinion statements made by native speakers of Japanese (NS) and Korean learners of Japanese (KR). Answers to opinion-seeking questions were collected from 18 NS and 19 KR and served as data for our analysis. It was found that the speaker's claim tended to be stated at the beginning and end of both NS and KR opinion statements, but some of the KR statements only contained background information and lacked clear claims. An analysis of conjunctive expressions revealed that the use of conjunctive expressions was optional when moving from claim to reasoning, but KR were more likely to use conjunctions like *nazenara* ("because") or *nazekatoiu* ("the reason why is"). When concluding a statement with a final claim, both NS

and KR frequently used conjunctive particles, such as *node* (“because of”), but it was KR statements that included more conjunctions such as *sorede* (“because of that”).

1. はじめに¹

日本語と韓国語では文法構造に共通点が多く、韓国語母語話者にとって日本語は比較的習得しやすい言語であると言われており（金田一 1988、中野 1998）、上級レベルに達する学習者も多い。実際、韓国語を母語とする日本語学習者の数は国内外ともに多く、留学生として日本の大学で学ぶ韓国留学生数は国別で第4位となっている（独立行政法人日本学生支援機構 2019）。

日本の大学で学ぶ留学生にとって、日本語でレポートや論文を書くことは容易ではなく、アカデミック・ライティング研究の分野では、留学生が日本語でレポートや論文を書く際にどのような困難に直面するのか、また、どうすれば留学生のレポートや論文が改善されるのかを探る様々な研究がなされている。韓国語を母語とする日本語学習者が書いた文章も対象になっており、日本語母語話者と韓国語を母語とする日本語学習者の文章では論理展開の方法が異なる可能性が示唆されている（飯干 2014、伊集院・盧 2015、金 2006）。しかし、話し言葉である意見陳述の特徴を分析したものは管見の限りでは見当たらない。アカデミック・ライティングを含むアカデミック・ジャパニーズの分野に限らず、話し言葉を対象とした研究が書き言葉に比べて少ない理由としては、話し言葉の研究はデータ収集および分析のプロセスが書き言葉と比べて煩雑であること、さらには、話し言葉の特徴として、文や段落などに相当する分析ユニットの認定が複雑であることが考えられる。しかしながら、留学生にとって自分自身の意見を日本語で述べる機会は授業内外で頻繁にあると考えられ、話し言葉の特徴を探ることは重要な研究課題である。韓国語を母語とする日本語学習者の意見陳述にはどのような特徴があるのか、また、習得が困難だと考えられる要素があるのか明らかにしていく必要がある。

本研究では、日本語母語話者 18 名と、韓国語を母語とする中上級日本語学習者 19 名に意見を求める質問をし、その回答の談話構成と論理展開の仕方に関わる接続表現を分析した。その結果をもとに、日本語母語話者と韓国語を母語とする日本語学習者の意見陳述の特徴の一端を解明する。

¹ 本稿は 2019 年 4 月に開催された韓国日語教育学会の予稿集「韓国語を母語とする中上級日本語学習者の意見陳述にみられる特徴」の発表要旨に大幅な加筆を加えたものである。

2. 先行研究

2-1. 意見文と意見陳述の談話構成に関する研究

Hinds (1990) は日本語と韓国語を含む4ヶ国語の文章構造の特徴について分析し、日本語も韓国語も文章の目的が遅れて提示され、書き手が結論を明示せずその理解を読み手に委ねるという点で類似していることを示唆しているが、伊集院・盧 (2015) は、文章の構造に影響するのは言語だけではなく、文章のジャンルやその時代の教育も考えられるとして Hinds (1990) の分析に異を唱えている。実際に、現代の学校教育では「論理的に意見を述べる能力」が重視されており (前川 2017)、Hinds (1990) の見解は現代のアカデミックな文脈とは合っていないと考えられる。

では、韓国語を母語とする日本語学習者の意見文の談話構成にはどのような特徴があるのだろうか。伊集院・盧 (2015) は日本語母語話者 (JJ)、韓国語を母語とする日本語学習者 (KJ) の日本語の意見文および、韓国語母語話者 (KK) の韓国語の意見文の主張の位置を分析し、JJ の意見文では主張が開始部と終結部に述べられているものが多いが、KJ および KK の場合は、終結部のみに主張が述べられているものや、文章の途中と終結部に述べられているものが開始部と終結部に述べられているものと同様の割合でみられたと報告している。また、JJ は文章の冒頭で主張を述べているものが半数近くであったが、KJ と KK の場合は、時代的背景や個人的経験を述べているケースが7割以上だったことも指摘している。

飯干 (2014) は「死刑制度の賛否」というテーマで、韓国語を母語とする中級から超級レベルの日本語学習者に意見文を書かせ、主張の位置を分析している。その結果、主張が開始部と終結部両方にあらわれているものが一番多かったと報告している。また、背景情報を述べたあとに主張を述べ、終結部に再度主張を述べるパターンが次に多く、文中2度主張を述べる傾向があることが明らかになった。ただし、飯干 (2014) では日本語母語話者データがなく、学習者の習熟度にも幅があるため、結果を他の研究と比較する際には注意が必要である。

Lee (2006)、石塚・成田 (2009)、伊集院・高橋 (2012) も日本語母語話者と日本語学習者の意見文を比較しており、対象の学習者の中には韓国語を母語とする学習者も含まれている。いずれの結果も母語話者には意見文の開始部と終結部に主張を述べる傾向があると報告しているが、韓国語を母語とする日本語学習者の意見文には開始部のみや終結部のみ、または文章の途中と終結部に主張があらわれるといった結果が出ており、決まった談話構成がみられないことが示唆される。

以上から、日本語母語話者は書き言葉においては、意見を述べる際にはその開始部と終結部で主張したいことを提示する傾向があるが、韓国語を母語とする日本語学習者の意見文は必ずしも同じような談話構成ではないことがわかる。ただし、母語話者の意見文でも、

主張が開始部と終結部にあらわれる割合は調査によって 60.4% (伊集院・高橋 2012) から 78% (石塚・成田 2009) と開きがあり、文章のジャンルやタスクによってその割合が変わる可能性があることにも留意したい。

一方、話し言葉である意見陳述の談話構成について分析したものはほとんどなく、韓国語を母語とした日本語学習者を対象にしたものは管見の限り見当たらない。

Iwasaki (2009) はアメリカ在住の日本語母語話者と日本語学習者に新聞記事を読ませた上で、口頭でインタビューをし、その際の談話構成について言及している。Iwasaki (2009) が対象としたのは、母語話者 4 名と学習者 4 名で量的分析は行っていないが、母語話者は主張を述べる前に背景情報や根拠を述べていたのに対し、学習者の場合は主張から意見陳述が始まる傾向があったと述べている。

荻原 (2009) は、日本語母語話者 48 名分の OPI (Oral Proficiency Interview) の発話から、意見を述べている部分を抜き出し、母語話者には意見を述べる談話の終結部または後半部分で主張を述べる傾向があると分析している。しかし、荻原 (2009) が分析したのは、OPI の回答から抜粋された談話であり、話題や聞き手であるテストターの談話への介入の度合いなどは統一されていないことに注意しなければならない。

横山 (2016) は日本語母語話者と英語を母語とする中上級日本語学習者の意見陳述の論理展開を比較している。母語話者と学習者には同様の課題が与えられ、モノローグで自分自身の意見を述べている。分析の結果、母語話者の意見陳述は、開始部と終結部両方に主張を述べているものが多かったのに対し、学習者の意見陳述は意見陳述の開始部のみに主張を述べるパターンが多かったと述べている。さらには、日本語の習熟度別にみたところ、上級の学習者の傾向が母語話者に近かったことから、習熟度が上がるにつれて論理展開の型が母語話者に近づく可能性を示唆している。

以上のように、話し言葉である意見陳述については十分に調査が行われているとは言えず、母語話者も学習者もまだ傾向が明らかになっていない。

2-2. 意見文と意見陳述の接続表現に関する研究

韓国語を母語とする日本語学習者の使用する接続表現に注目したものには、金 (2017) がある。金 (2017) は、金澤編 (2014) に収められている「YNU 書き言葉コーパス」を資料として、韓国語を母語とする学習者の接続詞の使用傾向について調べている。その結果、学習者は「しかし」等の逆接の接続詞の使用が多く、使用しているタスクや使用箇所において日本語母語話者や中国語を母語とする日本語学習者とは異なる傾向にあり、「接続詞の指導に当たり文章の構造や意見の展開においても母語による違いがあることを教師が意識する必要がある」としている (金 2017: 80)。また、金 (2014) では、韓国語と中国語を母語とする日本語学習者のデータを分析した上で、学習者には日本語の習熟度にかかわら

ず「そして」の使用が母語話者に比べて多い傾向があるが、その使用頻度は習熟度が上がるにつれて低くなっていくと述べている。

韓国語以外を母語とする日本語学習者を対象にした研究には、浅井(2003)と田代(2007)がある。浅井(2003)は、母語話者30名と中国語を母語とする学習者32名にゴミ問題をテーマに作文を書かせたところ、学習者のほうがより多く接続詞を使っていたと報告している。その要因として、学習者は論理関係を明示的に示すために文と文のつながりに接続詞を用いているのではないかと分析している。田代(2007)は母語話者と中国語を母語とする中級日本語学習者の喫煙についての作文を比較し、浅井(2003)同様、接続詞の平均使用数は学習者が多く、母語話者は接続節や文末表現、さらには「理由」といった名詞で原因や理由を提示していたと報告している。

話し言葉を対象にした研究はほとんどないが、横山(2016)は日本語母語話者と英語を母語とする中上級日本語学習者の意見陳述中の接続表現の使用を比較し、母語話者は談話の中で接続助詞「～ので」を用いる傾向が強かったのに対し、学習者は接続詞「だから」や接続助詞「～から」の使用が特徴的であったと報告している。

意見陳述ではないが、発話中の接続表現を分析したものには新村(1996)がある。新村(1996)は、日本語母語話者10名および日本語学習者10名による、説明を中心とした談話の中で用いられていた接続詞と接続助詞の使用を比較している。その結果、接続詞の平均使用数は学習者が、接続助詞の平均使用数は母語者が多く、横山(2016)同様、学習者の談話には接続詞「だから」や接続助詞「～から」が多かったのに対し、母語話者の談話には「～ので」の使用が多かったと述べている。

接続表現は話し言葉ではあまり分析の対象とされてこなかった。しかし、接続表現は談話構成の要となる要素であり、談話構成を明らかにする上では接続詞および接続助詞に注目する必要があると考えられる。

3. 本研究の目的と概要

本研究では、日本語母語話者(以下 NS)と韓国語を母語とする中上級日本語学習者(以下 KR)の意見陳述における談話構成と接続表現の使用にどのような傾向があるのかを分析する。中上級学習者を対象としたのは、質問文の語彙や表現の難易度を考慮したことに加えて、ある程度まとまりのある意見を述べるには中級以上の習熟度が必要だと考えたためである。

以下の表1は NS と KR の基本情報をまとめたものである。KR の日本語能力は SPOT (Simple Performance-Oriented Test) 90 で測定し、その得点から KR の日本語能力は中級お

よび上級であると判定した²。

表 1 調査協力者の基本情報

	母語	年齢	性別	所属	SPOT90 の得点
NS n=18	日本語	平均 21.8 歳 (18～34 歳)	男性 n=9 女性 n=9	学部生 n=11 大学院生 n=7	
KR n=19	韓国語	平均 23 歳 (18～30 歳)	男性 n=11 女性 n=8	学部生 n=11 大学院生 n=1 交換留学生等その他 n=7	平均 78.1 点 (68～85 点)

データの収集は調査者と参加者が 1 対 1 の対面で行った。各参加者に「テクノロジーは私たちの生活を複雑にしたと思いますか、思いませんか。どうしてそう思いますか。理由が分かるようにできるだけ詳しく、具体例を使って、自分の意見を述べてください」等、同意・不同意や選択肢のうちどれが一番いいかを問う課題文を書面で提示し、口頭で意見を述べてもらい、その音声を文字化してデータとした。質問は 10 問 (A1～A10) 準備したが、一人につき 2 問質問したため、回答数は NS が 36、KR は 38 となった。回答の長さは NS の平均が 58.3 秒で、KR の平均が 81.9 秒と差があり、最も長い回答は KR の 239 秒であった。

談話構成の分類は以下の基準を設け、調査者 2 名で行った。

主張：質問に対して、自身の意見や立場を明確に表明している発話

根拠：自身の主張の理由や客観的な証拠について述べている発話

譲歩：自身の主張とは相反する立場に理解を示す発話、または自身の主張の問題点や限界を認めている発話

反論：譲歩した内容について、それでも自身の主張のほうが正しいことを導くための理由を述べる発話

背景：主張に関連する個人的経験や状況、歴史的背景について述べる発話

さらに、主張の位置が談話の開始部、途中、終結部のどこにあらわれているかに着目して 8 つの型に分類した。分類の方法は飯干 (2014) と伊集院・盧 (2015) を参考に表 2 のようにまとめた。表中の「はじめ」は談話の開始部、「おわり」は終結部、「なか」はそれ以

² SPOT は筑波大学留学生センターによって開発された。詳細および「得点の解釈」については以下のページを参照した。<http://ttbj-tsukuba.org/p1.html#pageLink02>

外の部分を指し、○はそれぞれの箇所にも明示的な主張が述べられていたことを示す。

表 2 主張の位置による談話構成の分類

	はじめ	なか	おわり
頭型	○	-	-
中型	-	○	-
尾型	-	-	○
頭尾型	○	-	○
頭中型	○	○	-
中尾型	-	○	○
分散型	○	○	○
非明示型	-	-	-

接続表現の分析は、1) 回答開始部で主張を述べて続けて根拠を述べる際に用いられた接続詞と、2) 回答終結部で主張を述べる際に用いられた接続助詞および接続詞を抜き出して NS と KR の傾向を比較した。接続詞の抽出は石黒（2008）を参照した。

以下は「人生において頑張ることとリラックスすることとどちらのほうが大事だと思うか」という問いに対する NS の回答の例である。下線部は主張を示す発話で、四角で囲んでいる箇所は接続表現の使用箇所である。

（例 1：NS05 質問 A9）

自分は人生においてリラックスすることのほうが 1 番大事だと思います。なんでかっていうと、その、いろんな作業をすることにおいて、自分の脳が、その、常に頑張ってる状態だと、オフを経験しないから、疲れ切ってるんですね。で、どっかで切って、で、この作業はここで終わり、っていうところで切って、1 回休ませてやらないと、ずーっと次の作業にうつったあとも前の作業のこと考えたりとか、他のこと考えたりとか、もしくは集中できなかつたりとかってするとすごく効率が悪いから、むしろリラックスする時間をぐーっと思いきりって、でやるべきことをやる、ときは、もうほんとに短い時間でちっとやる。で、それでリラックスしてる時間にまた、リラックスしつつもいろんな知識蓄えられるから、例えばテレビ見るだけでも、お笑いの話が入ってきたり、いろんな世の中の情報が入ってきたりニュースが入ってきたり、して、またそこで考えがふくま、深められて考える時間があるって、で自由に頭を使えるから、もっと、考えがフレキシブルなんですね。だから、自分にとってリラックスすることが 1 番、大切だと思います。

例 1 の回答では、NS05 が「人生においてリラックスすることのほうが 1 番大事だと思います

す」と自身の立場を表明し、「なんでかっていうと」から始まる発話でなぜそう思うか述べている。そして、回答の終結部で「リラックスすることが1番大切だと思います」と主張を再度述べているが、接続詞「だから」によって根拠から主張へと談話が展開されている。

それぞれの回答の談話構成と接続表現を上記のように分析することで、どのような論理展開で、どのような接続表現を用いて意見陳述が構成されているかが分析可能になる。

4. 結果

4-1. NS と KR の意見陳述における談話構成

表3はNSとKRの回答中の主張の位置をもとにした型を比較したものである。

表3 意見陳述における主張の位置

型	NS (n=36)	KR (n=38)
頭型	8 (22.2%)	10 (26.3%)
中型	0 (0.0%)	0 (0.0%)
尾型	3 (8.3%)	1 (2.6%)
頭尾型	18 (50.0%)	17 (44.7%)
頭中型	3 (8.3%)	1 (2.6%)
中尾型	0 (0.0%)	1 (2.6%)
分散型	4 (11.1%)	4 (10.5%)
非明示型	0 (0.0%)	4 (10.5%)
合計	36 (100.0%)	38 (100.0%)

表3から、NSとKRいずれも回答の開始部と終結部両方に主張を述べている頭尾型が最も多く、次に頭型が続いておりNSとKRの傾向は類似したものとなった。

一方、KRの意見陳述の談話構成で注目には値するのは非明示型に分類された4件の回答である。いずれも明示的な主張は述べられてはいないが、発話の内容から発話者の立場や意見を推測できるものもある。それら4件の回答のうち3件は「背景」から始まっていた。以下の例2がそのような意見陳述の例で、「成功には運は必要か」という質問への回答である。

(例2: KR11 質問 A7)

こういう質問、の内容、については、いつも、考えていますが、あー、ま、昔、なんか、いろんな、昔

の有名な人、たちのなんか、げきげん？といますか、なんか話、話し言葉？書いてた、本がありましたて、あそこにも、こういうことを、その人が、どう思ったか短く書いてたものがありました。それは人は、機会を増すんじゃないかと、時を待つっていうことで、実は、こういう考え方で今まで、あー、やってきたんじゃないのか、自分なりにはそう思ってます。[で]、んー、きか、機会、といますか、時といますか、それ、を全部運としたら、んー、確かに運がないと、人には、誰かに見させる、とか、そういう、能力を、んー、人の前で見せる場所がないと、確かに、大変じゃないかと思えます。ーん、で、んー、そういう、運が、どこかで、それが、じん、人間関係とか、あー、能力とか、どこかで、発揮して、今、今まで人らの、なんかあの、人ら、どういう人なのかを、決めているんじゃないかと思えます。あー、以上です。

例2の回答は接続詞「で」を境界に背景と根拠に分けられると考えた。前半部分はKR11が、ある人物の言葉の通りに自身も行動してきたことを述べているが、質問の「成功には運は必要か」の根拠とはなりえず、また主張でもない。その後、接続助詞「で」のあとに、運がないと自分の能力を見せる機会が得られないと述べており、これは「成功には運は必要だ」という意見を支持する根拠であると推測できる。ただし、明確に自身の立場を表明する発話がないため、主張のない意見陳述となってしまっている。

さらには、以下のように、背景のみで根拠も主張もない回答があった。

(例3 : KR04 質問 A9)

あ、韓国、は、本当に、大学入試が重要なので、んー、小学生から今は小学生から中学生も高校生も大学入試を準備して、んー、早期教育が普通、みんな、みんな、みんな、早期教育を受けるよう、受けるぐらい、あー、大学の入試が、重要なんです、私も高校生の時、んー、あー本当に、あー、進学だったんですが、[中略 自身の受験と編入の経験について述べている]それで、あー、編入、編入した後、ソウルである、じ、が、だ学校を通いながら、ソウルを生活しながら、本当に、地方より、この学生たちの、姿勢が、んー、勉強する姿勢も宿題をする課題をする姿勢も、んー、少し異なるんですけど、んー、編入したあと、あ、それが本当に、重要じゃないと思って、ちょっと私の気持ちがリラックスになりました。それで、んー今も、んー、卒業した後、また日本に来て、日本語勉強して、大学院を進学したことも、んー、本当に、私今、20代後半として、ちょっと遅れるかもしれませんが、また、リラックスしたの気持ちがあったので、私がまた挑戦する気持ちができ、るんじゃない、できたじゃないかと思って、今あの、勉強本当に楽しいです。はい。

これは例1と同様の質問に対する回答であるが、受験勉強を頑張ったという自身の経験について述べたあと、気持ちがリラックスするようになったきっかけがあり、また勉強を頑張れるようになったと述べている。回答の開始から終了まで3分以上話をしてしたが、結局どちらの立場なのかは明確にせずに終わっているため、これを背景のみの回答とみな

した。

4-2. NS と KR の意見陳述における接続表現

意見陳述中の接続表現は、1) 回答開始部で主張を述べて続けて根拠を述べる際に用いられた接続詞と、2) 回答終結部で主張を述べる際に用いられた接続助詞および接続詞、に分けて分析をした。以下の表 4 は、NS の回答 36、KR の回答 38 のうち、回答開始部に主張から根拠へ談話が展開したものを抜き出し、その際の接続詞の有無および種類を分類したものである。

表 4 意見陳述開始部で主張から根拠へと談話を展開する際の接続詞の使用

	NS (n=31)	KR (n=27)
なぜ (なぜかという、なぜなら)	5 (16.1%)	12 (44.4%)
例えば	4 (12.9%)	1 (3.7%)
で	1 (3.2%)	1 (3.7%)
でも	0 (0.0%)	2 (7.4%)
それは	1 (3.2%)	0 (0.0%)
接続詞なし	20 (64.5%)	11 (40.7%)
合計	31	27

結果から、主張から根拠へと談話を展開させる際に KR は「なぜなら」や「なぜかという」と等、「なぜ」を含む接続詞を用いてこれから理由を述べることを示すケースが最も多かったことがわかった。一方、NS の場合は、主張から根拠へと談話を展開する際に接続詞を用いないケースが最も多かった。例えば、「理由は」「理由としては」等、「理由」という名詞を用いてこれから根拠を述べることを表現しているものがあり、NS では 5 件、KR では 2 件確認された。

以下の例 4 は NS が接続詞を用いず、主張から根拠へと談話を展開しているケースである。

(例 4 : NS03 質問 A6)

はい、私は教育のレベルが高ければ高いほど、人生に成功すると思います。あの、成功をなん、何で定義するか、分からないんですが、私の考える成功はやはり、就職がちゃんとできて、ある程度働いてお金ももらえてということを考えています。そう考えると、やはり就職の可能性ですとか、そういったものを考えたとき、教育は、受けてきた分だけ、自分のことをアピールできる材料になりますし、そうい

った意味では、あの、レベルが高ければ高いほど、あの、人生に成功できると思います。

NS03 は回答の開始部に「教育のレベルが高ければ高いほど人生に成功すると思います」と主張を述べ、最後にも同じ主張を繰り返しているが、その根拠として自身の見解を主張と主張の間に述べている。開始部の主張から根拠に談話が移行する際は「あの」というフィラーが挿入されているが、「なぜなら」「例えば」「理由は」といった、自身の主張の理由について言及するという指標はみられないことがわかる。

次に、回答の終結部に主張が述べられている際の接続表現の結果である。NS と KR の回答のうち、主張で回答が終わっている場合どのような接続助詞または接続詞を用いて最後の主張へと談話を展開させているかに着目したわけだが、例 1 のように接続詞を用いて展開させているものと、以下の例 5 のように接続助詞を用いているもの、さらには接続助詞と接続詞両方用いているものが確認できた。

(例 5 : NS09 質問 A2)

小学生や中学生も携帯やスマホを、学校に持って行っていいと思います。えっとー、大人や高校生とか大学生とか他の年齢の人も、携帯電話は今欠かせないもので、普通に持って行って、仕事だったり、ま、仕事じゃなかったり使ったりしてると思うので、小学生や中学生も同じようにしていいと思います。

以下の表 5 は回答終結部に主張を述べる際の接続助詞・接続詞の使用をまとめたものである。

表 5 意見陳述終結部で主張を述べる際の接続表現

	NS (n=25)	KR (n=23)
接続詞のみ	4 (16.0%)	7 (30.4%)
接続助詞のみ	16 (64.0%)	12 (52.2%)
接続詞+接続助詞	2 (8.0%)	3 (13.0%)
なし	3 (12.0%)	1 (4.3%)
合計	25 (100.0%)	23 (100.0%)

分析の結果、接続助詞も接続詞も用いていないものは、NS は 25 件中 3 件、KR は 23 件中 1 件と少なく、回答終結部の主張へと談話を展開させるためにいずれかを用いている場合が多いことが明らかになった。接続詞のみを用いているケースは KR に多く、23 件中 7 件 (30.4%) であったのに対し、NS の場合は 25 件中 4 件 (16.0%) であった。接続

詞の種類に関しては、NSは「だから」が3回、KRは「だから」と「それで」がそれぞれ2回用いられていたが、他には「なので」「それから」「で」など多様な接続詞が用いられていた。一方、接続助詞に関しては以下の表6にみられるような傾向が確認できた。

NSとKRいずれの場合も「～ので」が高頻度で用いられているが、KRに特徴的なこととして、NSには用いられていた「～し」の使用がなかったことが挙げられる。また、「～から」は、頻度は少ないがNSとKRいずれの回答にも用いられていた。

表6 意見陳述終結部で主張へと談話を展開させる際の接続助詞の使用

	NS (n=25)	KR (n=23)
～ので	12 (48.0%)	10 (43.5%)
～から	1 (4.0%)	3 (13.0%)
～し	3 (12.0%)	0 (0.0%)
～て	2 (8.0%)	0 (0.0%)
～けど	0 (0.0%)	2 (8.7%)
接続助詞なし	7 (28.0%)	8 (34.8%)
合計	25 (100.0%)	23 (100.0%)

5. 考察

5-1. NSとKRの意見陳述における談話構成

本研究で用いた36件のNSデータ、および38件のKRデータから、同意か不同意または選択肢の中から選んで立場を表明する意見陳述談話では、NS、KRいずれの場合も回答の開始部と終結部両方に自身の主張を述べているものが最も多かった。これまでの意見文の研究で、韓国語を母語とする日本語学習者に最も多くみられた型は頭型³（石塚・成田2009）、頭尾型（飯干2014）、尾型（伊集院・盧2015）とばらつきがあり、母語話者と対比させた研究では、いずれも母語話者の傾向と異なる結果であった。本研究では母語話者と学習者で傾向が似ていたわけであるが、その要因として、書き言葉と話し言葉の違いであるという説明と、学習者の日本語の習熟度が高く、日本語母語話者の談話構成に近づいたという考察が可能である。

意見文では与えられた課題に対してある程度時間をかけて、主張の位置を含む論理展開について考えてから書くことが可能であり、書き手の意図が反映できると思われる。ま

³ 石塚・成田（2009）は「頭型」ではなく「頭括型」という名称を用いている。

た、伊集院・盧（2015）の結果にみられたように、そこに母語の影響が出ることは十分に考えられる。しかし、意見陳述の場合は、与えられた課題について瞬時に考えをまとめ意見を述べなければならず、確実に相手に主張を伝えるためには、まずは自身の立場を表明して、そのあと根拠を述べ、再度確認のために主張を述べるという形を無意識に選んでいた可能性がある。

また、学習者の習熟度との関連は、横山（2016）で示唆されており、本研究の学習者の習熟度が高く母語話者の傾向に近づいたという考察も可能である。実際に、本研究の学習者 19 名を SPOT の点数から中級と上級で分け、型の分類を試みたところ、上級である 8 名の主張の型は 50%が頭尾型で、母語話者の割合と同じであったのに対し、中級と分類された学習者の数字は 40.9%にとどまっていた。

一方、KR に主張のない発話が 4 件あったことは母語話者と学習者の違いとして注目すべき点である。例 2（KR04）と例 3（KR014）のように、明確に立場を表明する発話がなく、その代わり回答開始時に関連した話題について自身の経験を話しているものがあり、結局聞き手に自身の意見を伝えられていないものがあつた。韓国語で書かれた意見文と、韓国語を母語とする日本語学習者の日本語の意見文には、開始部に背景情報が書かれていたものがみられた（伊集院・盧 2015）という結果から、意見を述べる際に背景情報から談話を始めるというのは韓国語母語話者の傾向である可能性もあり、それが話し言葉にもあらわれた可能性はある。しかし、背景情報が述べられたあとに主張が述べられていないというのは意見陳述としては成立しないため、原因を探るとともに学習者への教授に反映させる必要がある。

5-2. NS と KR の意見陳述における接続表現

意見陳述中にみられた NS と KR の接続表現は、回答開始部と終結部にあらわれた接続表現に焦点を当てて分析をした。回答開始部では、まず主張を言い切りの形で述べて、そのあとに根拠を述べる談話構成が多かったが、その際に NS は接続詞を用いずに談話を展開させているケースが最も多かったのに対し、KR のデータには「なぜなら」や「なぜか」というと」を用いてこれから理由を示すことを明確にした上で根拠を述べているものが最も多くみられた。「なぜなら」は主に書き言葉で用いられる表現ではあるが、母語話者の使用も認められており、今回のアカデミックな意見陳述の場合、話し言葉でも使われることがわかった。また、接続詞は使っていないが、「理由は」や「理由としては」など「理由」という名詞を使った表現が複数見られ、特に母語話者の使用が多かった。これは田代（2007）の母語話者の作文の分析結果とも一致しており、書き言葉・話し言葉両方に

において母語話者によく用いられる表現であることが示唆される。

学習者の「なぜなら」や「なぜか」という使用が多い要因としては、日本語学習の課程で得られた知識を使っているか、または母語からの翻訳が考えられる。日本語の表現としては間違いではなく、また明確な論理展開ができているという点では意見を述べる際には効果的な表現だとは言えるが、そのような表現が必ずしも必要なわけではない。ほかにも「理由は」といった表現やフィラーなどが談話の展開の指標にもなりうることに気づかせることは、多様な日本語の表現方法を身につけさせるという点では有用であると考えられる。

回答が主張で終わっている場合に、主張へと談話が移行する際の接続表現については、開始部の結果同様、接続詞のみを用いているのは NS よりも KR のほうが多いという結果となった。談話の開始部、終結部いずれの場合も接続詞の使用が多いということは、談話を展開させるのに接続詞を使用する傾向があるのは学習者の特徴であると言え、これまでの話し言葉と書き言葉の先行研究とも一致している（浅井 2003、金 2014、田代 2007、新村 1996）。今回の調査でも時間的には KR のほうが長く話をしてはいるが、談話をつなぐ表現としては接続詞に頼る傾向があり、NS のように接続詞を用いずに談話を展開させる、または接続詞ではなく接続助詞を用いて談話をスムーズに展開させていくことにはまだ困難が残ると言えるのではないだろうか。

しかしながら、NS と KR が使用していた接続助詞のみに注目した場合、その種類に関しては大きな違いはみられなかった。NS も KR も接続助詞「～ので」の使用が最も多く、先行研究で言われていた「～から」の使用はあまり見られなかった。本研究の学習者の日本語の習熟度が影響した結果かもしれないが、先行研究とは一概に比較できないため今後の研究課題としたい。

一方、接続助詞「～し」は、NS のデータには 3 件使用が認められたが、KR の回答には 0 件であった。接続助詞「～し」は初級の文法であり、日常生活でもよく耳にしているとは思いますが、KR にとっては「～ので」と「～から」が理由を述べるための接続助詞であるという意識が強く、「～し」を活用することができていないのかもしれない。本研究では接続助詞の使用については回答の終結部のみに着目しているが、「～し」は談話の途中に根拠から主張に談話を展開させたり、いくつかの根拠を述べる際にも使われていることから、学習者が使えると表現の幅を広げることになるのではないだろうか。

6. まとめと今後の課題

本研究の結果は韓国語を母語とした日本語学習者のみを対象とした調査の結果であり、

データ数としても規模が大きいものではない。しかしながら、話し言葉である意見陳述の談話構成や接続表現についてはまだほとんど研究が行われておらず、母語話者がどのように意見を述べているのかわかっていない点も多いため、その一端を解明するものとなった。

大学などのアカデミックな場面では、与えられた質問に対して即座に簡潔に、そしてわかりやすく自分の意見を伝える機会が多くあると考えられ、特に学部留学生にとっては、日本語で教養科目や専門科目の授業を履修する上で重要なスキルである。今回の結果から、学習者は発話時間が長く、談話の展開を接続詞に頼る傾向があることが示唆されたが、それらは意見陳述の簡潔さや流暢さにも影響を与える可能性がある。

もちろん意見陳述では説得力のある根拠を提示することが相手を納得させるための前提条件ではあるが、学習者の場合は談話構成のパターンや、そのために必要な接続表現を知っておくことで、中級レベルの段階から自身の意見を効果的に相手に伝えることが可能になるかもしれない。例えば、意見を述べる際には始めと終わりに主張を述べる、初級で学習した「理由は」や「～し」といった表現を活用するなど、学習者が使えるはずの表現をできるようにするために教室活動に取り入れていくのも一つの方法である。

今後の課題として、本研究では収集しなかった韓国語母語話者による韓国語の意見陳述データの収集が必要である。韓国語母語話者に本研究と同じタスクを韓国語で課すことで、韓国語を母語とする日本語学習者の談話構成や接続詞の結果に、母語の影響がどの程度あったのかが分析可能となる。また、韓国語を母語とする日本語学習者のデータ数を増やし、中級と上級のレベル別に分けて量的な分析をすることも意見陳述の習得プロセスを見る上で重要である。

さらには、日本語母語話者でも学部生と大学院生ではどのような違いがみられるのかも、データ数を増やし分析をする価値があると考えられる。本研究では大学院生のデータが7名分含まれており、談話構成を見たところ、頭尾型が57.1%と、学部生よりも割合が高いことがわかった。アカデミックな場面で意見を書いたり述べてりする経験が豊富な大学院生のほうが、頭尾型を好むのかデータを増やすことで明らかになり、これは大学生のためのアカデミックリテラシー教育にも還元が可能であると考えられる。いずれも今後の課題にしたい。

付記

本研究は平成 29-31 年度科学研究費助成事業（17K02847）の助成を受けたものである。

参考文献

Hinds, J. (1990). Inductive, deductive, quasi-inductive: Expository writing in Japanese, Korean, Chinese, and Thai. In U. M. Connor & A. M. Johns (Eds.), *Coherence in writing: Research and pedagogical perspectives*, (pp. 87-109). Alexandria, VA: TESOL.

- Iwasaki, N. (2009). Stating and supporting opinions in an interview: L1 and L2 Japanese speakers. *Foreign Language Annals*, 24, 3, (pp. 541-556).
- Lee 凧子(2006)「留学生の書く日本語意見文の分析-日本人学生との比較において-」『立命館法学』別冊ことばとそのひろがり 4: 399-412.
- 浅井美恵子(2003)「論説的文章における接続詞について-日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較-」『言葉と文化』 4: 87-97.
- 飯干和也(2014)「韓国人日本語学習者による意見文の構造に関する考察-「主張」に着目して-」『日本語学研究』 39: 157-173.
- 石黒圭(2008)『文章は接続詞で決まる』東京：光文社出版.
- 石塚ゆかり・成田育男(2009)「意見文における意見表明と反論提示-日中韓大学生の日本語作文を分析して-」『日本語教育方法研究会誌』 16(2): 38-39.
- 伊集院郁子・高橋圭子(2012)「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴-「主張」に着目して-」『日本語・日本学研究』 2: 1-16.
- 伊集院郁子・盧姪鉉(2015)「日韓の意見文に見られるタイトルと文章構造の特徴-日本語母語話者と韓国語母語話者と韓国人日本語学習者の比較-」『社会言語科学』 18(1): 147-161.
- 荻原稚佳子(2009). 「意見述べにおける日本人の論理展開についての一考察」『明海日本語』 14: 1-11.
- 金澤裕之編(2014)『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房
- 金宥曝(2006)「韓国人日本語学習者を対象とした日本語の文章能力に関する研究」『日本語教育論集』 22: 3-17.
- 金蘭美(2014)「『YNU 書き言葉コーパス』における日本語非母語話者の接続詞の使用-「そして」の多用に注目して-」金澤裕之編『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房: 267-286.
- 金蘭美(2017)「YNU 書き言葉コーパスに見られる日本語学習者の接続詞の使用について-韓国語母語話者の「逆説」関係の接続詞に注目して-」『横浜国大言語研究』 35: 79-93.
- 金田一春彦(1988)『日本語 (上)』岩波新書
- 田代ひとみ(2007)「中級日本語学習者の意見文における論理的表現」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』 14: 131-144.
- 独立行政法人日本学生支援機構(2019)「平成 30 年度外国人留学生在籍状況調査結果」(https://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/intl_student_e/2018/_icsFiles/afieldfile/2019/01/16/datah30z1.pdf) 2020 年 3 月 10 日閲覧
- 中野はるみ(1998)「韓国人学習者のシテ形接続と連用形接続」『留学生教育』 3: 75 -93.
- 前川孝子(2017)「意見文における意見の種類とその変遷-国語教科書 (1960年代~20代) のモデル作文を資料として-」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』 9: 64-72.
- 横山千聖(2016)「英語を母語とする中上級日本語学習者の意見陳述の談話構成と表現形式-日本語母語話者との比較をとおして-」修士論文, 広島